

難民としての我らと彼ら

表題は朝日新聞 10 月 6 日夕刊の池澤夏樹「終わりと始まり」である。戦争法「成立」から、もう 1 ヶ月近く経つ。早いものだ。でも、東京をはじめ全国各地で多様な集会・デモが続く。「アベ政治は許さない」などの声が聞こえてくる。池澤さんの声を聞いてみよう。

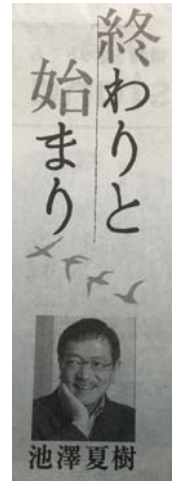
安保関連法が成立した。「戦い済んで日が暮れて……」思うことは多い。賛成票を投じた議員のみなさん、政府の説明が論理に沿って十分なものであったと思われての賛成なら、あなたは論理的思考能力に欠ける。充分でないと知って賛成したのなら、あなたは倫理的判断力に欠ける。どちらかに○をつけてください。次回の選挙の参考にします。

9 月半ば、国会議事堂前のデモの中に身を置いて、みな勇壮活発でどこか悲壮なシュプレヒコールに伍しているうちに、自分たちは日本国憲法から追放される難民になるのだと覚った。この国の国土が戦場に直結する時、非戦・平和に固執する民の居所はなくなる。これからは臥薪嘗胆の覚悟で失地回復・捲土重来に力を注がなければならない。(こういう話になると漢語が増えて肩に力が入る。もっとしなやかに考えて、したたかに動かなければ)。

シリアなど近東からの難民がヨーロッパに押し寄せてあちこちで混乱が起きている。ヨーロッパは地続きだから(地中海経由もあるが)、難民が渡りやすい。ではこれはヨーロッパの問題としてしまっているのか。はるかに遠いオーストラリアは 1 万 2 千人を受け入れると言った。ではシリアからオーストラリアと同じくらい遠い日本はどうするのか?

安倍総理は先日、ニューヨークでの記者会見で「移民を受け入れるよりも前にやるべきことがある。女性、高齢者の活躍だ」と述べた。これはどういう論法だろう。彼の真意は、今後の労働力不足を移民で補うつもりはないということだ。「女性、高齢者」を「活用」したいと言いたかったのだろう。記者の質問は難民のことだったのに、それは無視。移民は自分の意思で来る人、難民は住処を失ったよるべない人々。速やかな支援を必要とする人々。総理はこの二つを敢えてすり替えることで、難民は受け入れないと宣言したのだ。

去年、この国に来たいと申請した難民は 5 千人、認可されたのは 11 人! 要するにぜったいに入れまいと頑なに拒んで、できれば抛金で済ませたいと言って、難民に対する鎖国を貫いてきた。同じような姿勢でいるサウジアラビアは(我が外務省の好きな言



葉を使えば)「国際社会」で軽蔑の対象になっている。我々は異民族とのつきあいの経験が少なく、異文化を生活レベルで受け入れることに不器用かもしれない。しかしこの先のことを考えればずっと鎖国で済ませるわけにはいかないのは明らかだ。飛行機とインターネットの時代にここはもう島国ではない。

他国に倣って、ある程度の摩擦と苦勞を承知の上で、開国すべき時期ではないのか。人口比で言えば、ドイツの3万1千人に対してこちらは4万8千人ほどになるが、準備はよろしいか。

(2015年10月17日)